

—2019年度 卒業式より—

魂譲り（譲り手）

今日、私たちは活水女子大学での学びを終え、それぞれに与えられた新たな道を歩もうとしています。これまでの学生生活を振り返ると、様々な出会いや経験を通して多くのことを学びました。そこには喜びや楽しさだけでなく、思い悩むことや苦しいこともありました。しかし、どんなときも家族や友人、先生方、多くの人に支えられ、今日という日を迎えることができました。

活水学院は今から141年前、愛と奉仕を建学の精神として掲げ、「この学院に連なる全ての者が、いつまでも渴くことのない活ける水を豊かに汲み取り、永遠の命を得るように」との祈りを込め、エリザベス・ラッセル先生が創立されました。この手桶には、その思いが満ち溢れており、ここに結ばれてきたリボンの一本一本には、先輩方の祈りが込められ、活水の伝統として今もなお受け継がれております。

今回私は、卒業生を代表して、「白」と「オレンジ」のリボンを新たに結び加え、在学生の皆様にお譲り致します。白のリボンには、「何事にも恐れることなく、自分で決めた道を歩み続けてほしい」との願いを、オレンジのリボンには「太陽のように周りを照らし、自分自身も光り輝く人になってほしい」との願いを込め、お譲り致します。

在学生の皆様、どうかこの2本のリボンに込められた思いを心に留め、「活ける水を汲み取るもの」となってください。皆様の歩みの支えとなるよう、新約聖書コリントの信徒への手紙Ⅰ 13章13節の御言葉「信仰と、希望と、愛、この3つはいつまでも残る。その中で最も大いなるものは、愛である。」をお贈り致します。

この日まで私たちの学びを支えてくださった教職員の皆様、励まし合いながら共に歩んできた友人たち、また、祈りをもって私たちを見守ってくれた家族、そしていつも共にいて導いてくださった神様に感謝致します。

最後に、活水学院の上に、神様の豊かな祝福とお恵みがこれからも限りなくありますよう、心よりお祈り申し上げます。

高田 紗愛（健康生活学部食生活健康学科 卒業生）

魂譲り（受け手）

卒業生の皆様、ご卒業おめでとうございます。

これまで多くの先輩方より、受け継がれてまいりましたこの手桶をただいま、お譲り頂きました。今年は新たに、「何事にも恐れることなく、自分で決めた道を歩み続けてほしい」との願いを白のリボンに、「太陽のように周りを照らし、自分自身も光り輝く人になってほしい」との願いをオレンジのリボンに託し、結び加えて頂きました。

私たち在校生は、この2本のリボンに込められた思いを心に刻み、「永遠に渴くことのない活ける水」をくみ続ける活水の学生として、歩んでまいりたいと思います。卒業生の皆様はこの学び舎で、神様の限りない愛を受け、先生方やご家族の祈りに支えられ、様々な体験や学びを通して大きく成長されたと思います。これからは、それぞれの道を歩んでいかれますが、喜びや感謝の時ばかりでなく、忍耐が試される時や困難を覚え全てを投げ出したくなる時もあると思います。しかし、いつも神様は共にいて、皆様の行く手を照らし、導いてくださいます。どうか愛と希望を持って、これからの道を歩み続けてください。

最後に、今日から始まる新たな歩みの上に、神様の豊かなお恵みと祝福がありますよう、心よりお祈り申し上げます。

尾家 愛佳（健康生活学部子ども学科 2年）

一朝の礼拝から 1

自分の信仰に向き合う時

コヘレトの言葉 3章 1~15節

「何という空しさ、すべては空しい」で始まる「コヘレトの言葉」には独特の世界観や厭世観が描かれており、聖書の中でも異色の存在だと言われています。「空しい」という言葉の他に、「死」という語がコヘレトの中には何度も登場します。私は「コヘレトの言葉」を読んで、どこに希望があるのか、どこに神様の愛があるのかと悲観的になり、この書物がなかなか好きになれませんでした。しかし今では、コヘレトは決して悲観的な書物ではないし、この世の人生を否定しているものでもないことを理解できるようになりました。むしろこの世での人生の価値を積極的に捉え、主に感謝の心をもって、毎日過ごす大切さを説いている内容であると理解するようになったのです。コヘレトの言葉に頻繁に登場する「空しい」という表現、これは原語であるヘブライ語では「ヘベル」という言葉で表現されているそうです。小友聡先生によると、「ヘベル」には「空しい」「無益」「無意味」など否定的な意味の他に、「束の間」という意味もあるそうです。つまりコヘレトが本当に言いたかったことは、「人生は束の間なのだから、無駄にせず、今あるものに背を向けず、幸せに生きよ」と訴えかけているのではないかと指摘です。

今日お読みした箇所の中で2~8節は意味上対比する言葉が羅列されています。「殺す時」に対して「癒やす時」、「嘆く時」に対して「踊る時」、「抱擁の時」に対して「抱擁を避ける時」など。そしてコヘレトはこれらすべての出来事には時があると説いています。

教会生活を送っているクリスチャンは人と交わることで神様の愛について理解を深めてゆきます。しかし今は新型コロナウイルスの影響で、人と交わることが儘なりません。コヘレト的表現方法を用いるなら、「交わる時」もあれば、「離れる時」もあるということになるのでしょうか。自分もここ3ヶ月、一日の大半を一人で過ごしています。しかし空しいと感じたことはありません。むしろ祈る機会が増え、神様との関係や自分の信仰心について向き合うことができました。一人で自分を見つめ、毎日の食事を堪能し、健康で生きている恵みに感謝する時であると捉え、日々の生活を送るよう心がけています。

英語学科 狩野 暁洋

一朝の礼拝から 2

活ける水

ヨハネの福音書 4章 13・14節

ここの聖書箇所は活水の聖句でもありますが、今まで深く考えたことはありませんでした。最近この箇所を読み、じっくり考える時間をとりました。この箇所に出てくる「渇き」を私は人間の「心の穴」のことではないか、と考えました。人間には必ずと言っていいほど、全員、寂しさだったり、辛さだったり、疲れだったりなどで、心の穴があると思います。しかし、その心の穴をどう埋めるかによって、生き方が変わってくると思います。私の周りには、その心の穴を異性との関係で埋める人、何か楽しいことをして埋める人、それぞれの埋め方をする人がいます。ですが、その心の穴の埋め方は、一瞬であり、またすぐに開いてしまいます。

人間の心の穴は、神様にしか埋めることのできないものだと私は思います。神様はどんな時でも愛していただき、恵を与えてくださいます。私たちの心が渇くことのないように、活ける水を注いでくださいます。その為、その神様の愛を知っている私たちは、心の穴を感じてしまう時もあるとは思いますが、その穴は、深い穴や、完全に開いてしまったりしないのではないかと思います。そして、神様にしか埋める事のできない穴。と分かっている、実際に落ち込む出来事があったり、疲れたりすると心の穴を感じてしまう時があります。神様からの今までの恵みや愛を忘れ、自分の気持ちで一杯になり、なかなかそこから抜け出すことが難しくなります。

最近もそのような出来事がありました。しかし、気持ちが落ち着いてきた時に神様のことを考え、今まで神様がしてくださったことに感謝し、心が更に満たされ、再スタートすることができました。私は、世界中の方が、一瞬の愛や一瞬の楽しみではなく、神様は、永遠に愛をくださる方である。という事を知ることができれば良いなと思います。そのような最高の人生を送ることができる生き方を周りの方々に伝えていきたいです。

子ども学科 3年 尾家 愛佳

朝の礼拝から I

How long, O Lord?

Psalms13 : 2・3

The psalmist whose words are recorded in Psalm 13 feels that God has forgotten him

How long, O Lord? Will you forget me forever?

How long will you hide your face from me?

How long must I wrestle with my thoughts

and every day have sorrow in my heart? (Psalm 13:1-2)

We too ask, “How long?” How long until we can stop wearing masks? How long until life goes back to normal? How long until there is a vaccine for everybody? And we get different answers! Of course there will be a vaccine by next month. Well, we’re hoping for early next year. Six to nine months is a reasonable estimate!

What is truth, and what is “fake news”? Who do we believe? This isn’t just a modern problem. In the Old Testament, the prophet Jeremiah gives the people God’s message that the exile to Babylon will end after 70 years, and not to believe anything else. At the same time, another prophet is been telling them that they will be back in their own land in two years. Of course the people wanted to believe that the shorter time was correct, just as we would like to believe that a vaccine will be available quickly, but Jeremiah was right about a long wait, and we too will probably have to wait for a vaccine.

It can be very hard to decide what is true, even when people claim to be speaking for God. However, the words of Jesus can be trusted, and he makes promises with no time constraints!

“And surely, I am with you always, to the very end of the age.”

“The water I give will become in the believer a spring of water welling up to eternal life.”

How long for? Forever! Starting right now, if we choose to believe and accept

宣教師 シーラ・ノーリス (英語学科)

朝の礼拝から II

神は自粛していない

ペトロの手紙 4 章 8～11 節

オンライン授業から始まった 4 月、そして帰省ラッシュがない異例のゴールデンウィークも自宅で過ごし、いまやっと全国的に徐々に外出できるようになって来ました。教会も一時閉鎖して礼拝や集会を休止したところが多くあると思います。自宅にいてオンラインで仕事をしたり、授業を受けたり、礼拝をライブ配信で観るということが行われるようになりました。インターネットの技術が発展し通信インフラが整備されている現代だからこそ、ある意味ではオンラインで事足りてしまうのです。

教会はどうでしょうか？オンライン礼拝だと朝早くに起きなくていいし、面倒な奉仕もしなくていい、ビデオチャットで代わりができるから良いじゃないかと皆さんは思いますか？これは現代特有の問題で、過去に技術的に不可能だったものが現代では可能になりました。ですから過去の人たちはこの問題に答える事が出来ません。現代に生きる私たちが考えなければなりません。

私が所属しているルーテル教会も閉じてしまい、ルーテル青年会の企画するオンライン礼拝に参加していました。ここでは授業でも使われている zoom を利用してオンラインでの賛美や聖研などの集いをしました。家で独り歌う中で、メロディをリードしていただく人と奏楽の音、そしてそれとは別に色々な人の声がバラバラに聴こえてくるのが微笑ましかったです。それぞれの声がバラバラに聞こえながら自分もその波に乗ることで独りではないという事、そして神様がともにいてくださる事を感じました。賛美を通して神様に、私はここにいるよ！というメッセージを送るということであり、このような時だからこそ画面を通して皆で賛美し神様との対話を大事にするということの大切さを改めて感じました。今はソーシャルディスタンスを意識した生活により会えない人たちが多くですが、こんな時でも神様の愛は自粛しておらず、いつも神様がそばにいて寄り添っていること、隣人を思いやる心を育む時を与えてくださる神様の愛に感謝します。

別府 碧美 (音楽学科 2 年)

- 朝の礼拝から I -

「中村哲師、人とのつながりと信頼」

ヨハネによる福音書 4章13節、14節

福岡市東区にある香住ヶ丘教会に藤井健児牧師がいらっしゃいます。私は、藤井先生とは、教会学校の遠足で香椎花園に行ったときが最初の出会いでした。藤井先生は全盲です。「目は見えないけれども、心の目は見えるのです。」とおっしゃったことを今でも覚えています。先生が最初にバプテスマを受けた方が、当時中学3年生中村哲さんだったのです。1年前の12月、哲さんは、警備の方共々銃弾に倒れて、という悲しい出来事が起こってしまいました。先日北九州市で中村哲医師の功績を振り返るシンポジウムが開催されました。北九州市は哲さんが幼少期を過ごされたところ。その後は、古賀市に転居されました。当時は糟屋郡古賀町、かつて、福岡県古賀村、ここは、活水女園が1898年熊本より移転した地、哲さんは古賀市の自宅から西南学院中学校へ通いました。香住ヶ丘教会との関係は、「セイナンです。」と挨拶された、チャーリー・フェナー宣教師との出会いから、香住ヶ丘教会に来られるようになり、哲さんも一緒に来られるようになったということです。哲さんは当時、大きくなったら「僕はもの書きになります。」と、話は下手だが話題豊富で尽きない、文才がある。と藤井先生。火野葦平は哲さんのおじさんにあたる人です。哲さんは福岡高校へ進んでいます。高校の試験の日、「忘れていました。」というくらいボソッと、している少年だったそうです。私が覚えているのは、福高の文化祭ではペシワール会の募金箱が設置されていました。先輩の志を引き継ぎ、少しでも役に立てたいとの願いであったと思います。その後九州大学へ。ことさら大きなことをやろうというような人ではない、派手でなく、コツコツとやっていく人。当時の社会問題にも関心があり動いていたと聞いています。感性が豊かな少年、だが音楽は苦手、ですから藤井先生は哲さんと話している時クラシックの音楽をよく流していたそうです、現地アフガニスタンの家は石造りであるので、音楽の響きがよくこの時に耳にした音楽をよく聴かれていたようです。また、語学も得意で現地の言葉で信頼関係をつくることを大事にしていた人である。

藤井先生は、一年前の12月3日の夜中、哲さんの講演のテープを聴いていたそうです。すると、隣に哲君がいるようで、「頑張れよ。」と、その10時間後第1報が入った。ということでした。

前田志津子（子ども学科）



- 朝の礼拝から II -

「私たちは価値高く、貴い」

イザヤ書 43章4節

小学校の時から、いつも自分に寄り添い、良い影響を与えてくださる先生がいました。高校で進路を決めるにあたって、学校の音楽の先生になりたいと思い、活水女子大学への進学を決めました。大学では、教職と音楽の授業、吹奏楽部の活動の先生に恵まれ、本当に楽しかったです。しかし、お世話になった先生が増え、教師へのあこがれが増し、私の手におえる職業ではないという思いも増していきました。尊敬する先生方のようになれるとはとても思えず、自分が教師になるということが恐ろしくてしょうがなかったのです。4年生で採用試験の勉強を始めてもその恐怖は付きまとい、体調を崩しました。採用試験に失敗し、それを伝える度胸もなく、臨時採用の申し込みをしました。また、追い打ちをかけるような出来事が起こります。教員をされていた、高校の吹奏楽部の先輩が自ら命を絶たれたのです。まだ26歳という若さでした。心の中の私が、「やめよう。実習もやめといたら？」とささやきました。

そんな時、気分転換に顔をだした学内のクリスチャンの集まりで、この「イザヤ書」を読んだのです。「自分は人と比べて落ち込むことが多いけど神様が尊いと言ってくれる自分のことに自信をもちたい」と伝えてくれました。私はハッとしました。「三週間、精一杯やってみよう」。一瞬でそんな風に気持ちが切り替わったのです。

そして迎えた教育自習。そこで見たのは、悩み試行錯誤する先生の姿でした。初めから完璧である必要はないのだと気づかされました。最終日、いろんな先生に「あなたの生徒に接する姿と笑顔はいいものだったのでとても印象に残っている」と声をかけていただきました。自分の存在が認められた気がした瞬間でした。

来年、私はどこかで教員をしたいと思います。神様が私たちを「貴く、価値高い」と思っていて下さっていることを忘れず、そこで何を頑張るかを大切に、いつも祈り、神様がそばにいてくださることを心に留めたいです。

高濱 宥樹（音楽学科4年）

ー 朝の礼拝から I ー

 讃美歌「麗^{うるわ}しの白百合」について

雅歌 2 章 1~2 節

NHK 朝の連続テレビ小説『エール』は西原廉太氏がキリスト教の考証に関わり、エピソードが『キリスト教学校教育』（2020年12月号）や『プレジデントオンライン』（同10月21日配信）に載りました。主人公のモデル古関裕而^{こせきゆうじ}は昭和の作曲家で、高校野球大会歌「栄冠は君に輝く」「長崎の鐘」「雨のオランダ坂」も彼の作品です。奥さんは声楽家で、その母親（ドラマでは関内光子）は豊橋に住むクリスチャンでした。豊橋は軍都で、光子の家も軍に関わる会社だったという設定です。1945年6月19日深夜に豊橋はアメリカ軍の空襲を受けます。豊橋には私の父の実家もあり、爆弾で家に火が付くと、帰省していた学生の父はバケツで水をかけて消そうとしたそうです。

ドラマで薬師丸ひろ子演じる光子は、焼落ちた自宅で「麗しの白百合」を歌いました。薬師丸は大学の礼拝でよくこの歌を歌ったそうです。最初は静かに歌い始め、2番は絶唱になり、終わると撮影現場は深い沈黙に包まれたとのこと。

歌詞は野に百合の花が咲き出る春の喜びをキリストの復活になぞらえるもので、戦前の女子学生が好みました。信仰を前面に押し出さず、遠い昔話のように復活を歌うので、ノンクリスチャンの学生も入り込みやすかったのでしょう。春の花野で百合が咲き誇るさまは、日本の風景の中ですぐにイメージできます。

場面は反響が大きく、認知症の母がTVを見ながら涙を流して一緒に歌ったとの投書もありました。年をとって歌うと、若くて生命力にあふれた昔を回顧することと重なります。その頃にはもう戻れないけれど、神さまが何か生命の復活を自分にも成してくれる予感を抱かせます。私は豊橋空襲の時、青春時代であった父親のことを重ね懐かしさを感じます。直接説明がなくても、言葉とメロディ、そしてそれを受け止める人がいることで、神さまの働きが伝わることもあるのだなあと感じます。

細井 浩志（日本文化学科）



ー朝の礼拝から II ー

「何が神の御心か」

ローマの信徒への手紙 12 章 2 節

私たちの生活は、1年前とは全く変わりました。家にいる時間が増える中で、私はあるリアリティ番組をよく見ます。この番組では5人の専門家が、友人や家族から推薦された一人の一般人を改造していきます。

出演する一般人は、年齢も職業もルーツも様々です。共通しているのは、家族や社会に奉仕し、勤勉で、謙虚であると周りの人から評価されているところです。しかしながら、彼らは、自分に自信がなく、悩みや問題を抱えています。一人で両親の介護をして両親を見送り、一人暮らしをしているAさんは、職場以外では、人との交流が苦手です。アメリカに移民してきて、メキシコ料理店を切り盛りするBさんは、娘にルーツであるメキシコの文化を守ることを強要し、娘と仲違いしています。

専門家と接する中で、彼らの悩みや問題の原因は、社会の常識や普通という価値観にあることがわかってきます。Aさんが人との交流が苦手な原因は、独身であることを恥じていることにあり、Bさんの娘に対する態度はアメリカ社会に拒絶された経験から生じていました。悩みや問題の原因を自覚していくことで、自分が世の中の価値観に縛られていくことに気づき、自分らしさを見つけて変わっていきます。

番組を見るたびに、人間の悩みの根底には、世の中に倣おうとする姿勢にあることに気づかされます。この1年、これまで常識、普通とされてきたことが揺らいでいます。しかし、常識や普通が揺らいでいる今だからこそ、「何が神の御心であるのか、何が善いことで、神に喜ばれ、また完全あるかをわきまえるようになりなさい。」ということを中心に留め、それを実現していきたいと思います。

富永 祐子（日本文化学科）